



「声」の欄・投稿規定

- ★「声」の欄は読者の皆さんのお考えを、直接誌面に反映させるためのページです。皮膚病の診療に関する日ごろのご意見、新しいアイデア、ご提言などをお気軽にお寄せください。とくに日夜第一線で診療に活躍しておられる先生方からのご投稿を切望します。
- ★「声」の欄には、また皮膚病に関する“質疑応答”を取り上げます。お寄せいただいたご質問は、その方面の権威に依頼して適切な回答を用意し、誌上で発表いたします。とくに回答者を指名されても結構です。
- ★字数は一般のご投稿は1,200字以内、質問は600字以内を原則とします。
- ★ご投稿は郵送のほか、FAX（番号：03-3984-1003）とE-mail（アドレス：hifubyoh-shinryoh@kk-kyowa.co.jp）にても受け付けております。
- ★原稿には住所・氏名を明記していただきます。

「旧い資料」(Vol.41, No.12 Editorial) を読んで～20年後に役に立った貴重例

先般の「Editorial」を読んで、同じように考えさせられた経験があることを思い出しました。小生が1965年に熊本大学で診察した症例(23歳、女)は診断がつかないまま、似た症例のおまけとして1985年に発表しました¹⁾。その直後、ポーランドのJablonska教授より、先生が命名された先天性筋膜異栄養症なのではないかと指摘されました。大学に残っていた標本を染め直したところ、初診20年後ではありますが筋膜の変性が鮮やかに残っていました。

幸い同様な症例を宮崎医科大学でも経験したので、1987年のベルリン国際皮膚科学会で教授にお会いし、その症例は教授の論文で発表してもらうことになりました²⁾。

先天的に筋膜に編成をきたすまれな疾患で、宮崎医大例では鼠径部の筋膜が厚さ3～4 mmもありました³⁾。

姿勢、歩行の異常もきたします。予後はさまざまで、胸部が侵される場合には呼吸困難もきたします。

蛇足ですが私が宮古島に赴任していたときに、ある教授から「先天性筋膜異栄養症の患者に呼吸困難があるが、どうしたらよいか」とFAXで問い合わせがありました。「筋膜切開をしたらどうか」と返しましたが、その返信はありませんでした。いずれにしても、1965年の組織検査が杜撰であったと悔やまれます。

菊池 一郎
(熊本市)

〈文 献〉

- 1) Kikuchi I, et al : Pediatr Dermatol 3 : 48, 1985
- 2) Jablonska S, et al : J Am Acad Dermatol 21 : 943, 1989
- 3) 菊池一郎：現代皮膚科学大系年刊版'89-A, 中山書店, 東京, p216, 1989